

『資本論』第1巻第1篇第1章

「価値形態のエッセンス」

第1節 商品の二要素 使用価値と価値（価値実体、価値の大きさ）

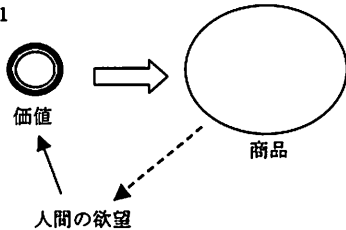
この節では、「使用価値と価値」という商品の二面性と、価値実体である「抽象的人間労働」、「社会的に必要な労働」、さらには価値を測りうるものとしての「労働時間」、「労働量」が述べられているが、ここでは、富の源泉である価値の内在化と外在化に焦点を絞って見ていきたい。加えて、説明を行う際に、主として『ヴァーグナー評注』を参照する。

79-80

1) 使用価値

「いかなる種類かの人間の欲望を充足させる物の属性」（有用性）のことを意味しており（『資本論』）、この「物に属する有用性」は、生産・消費過程で結ばれる物と人との関係において初めて、認識される（『ヴァーグナー評注』P362、『資本論』注3）。しかし、一方で、ヴァーグナーは、使用価値を「価値」と混同しており、さらには、「価値」と市場価格をも混同している（同上、P359）。そして、ヴァーグナーにとっては、この様な「価値一般」が、初めから商品の外側にあるものとして存在する。従って、ヴァーグナーによれば、それらの価値は、「人間の欲望にたいして立っている関係」（同上、P361 上-末 4）に基づいて「価値評価」（同上、P361 上-末 3）できるものである。つまり、ヴァーグナーは、

図 1

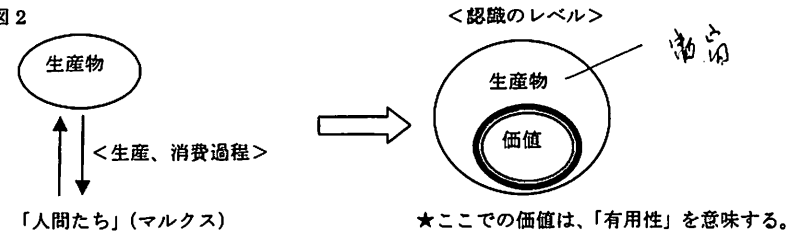


★ヴァーグナーは、活動する人間を単体（「人間というもの」-P363）として扱っている。

と考えたのであるが、これに対し、マルクスは、『資本論』4段落の中で、物の有用性は「空中に浮かんでいるものではない」と述べており、また、『ヴァーグナー評注』では、「人間はけっして『外界の物に対してこの理論的關係に立つ』ことから始めるのではない」（P362 上-末 7）。『価値』という一般概念は人間の欲望を充足する外界の存在物にたいする人間の関係から生じる」（P363 下-1）と述べ、ヴァーグナーに対する批判を行

っている。つまり、マルクスは、ヴァーグナーが言うところの「価値一般」に関して、

図 2

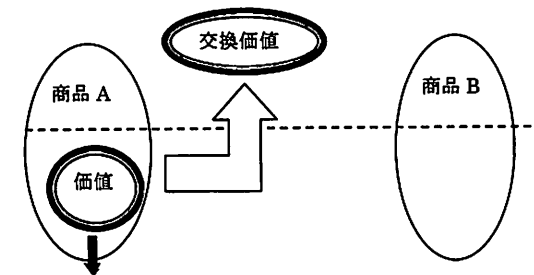


と考えたと思われる。そして、この意味においてこそ、使用価値は「いかなる種類かの人間の欲望を充足させる価値」となり、交換しうる「価値」の素材的な担手となる。つまり、ヴァーグナーが「外在的な価値一般」を考えたとに対し、マルクスは「内在的な価値」（属する価値）を考えたとであった。以上を踏まえて、次には交換価値の説明に入りたい。

2) 交換価値

まず、交換関係において等価であることを表しているのが、「交換価値はそもそもただそれと区別されるべき内在物の表現方式、すなわち『現象形態』でありうるにすぎない」（『資本論』注7の次の段落）とマルクスは述べている。つまり、交換価値とは、商品に内在している価値とは区別された「現象形態」のことを指す。

図 3



<抽象的な人間労働>（ここはほとんど「価値の証明」という位置づけ、とも読めそう）

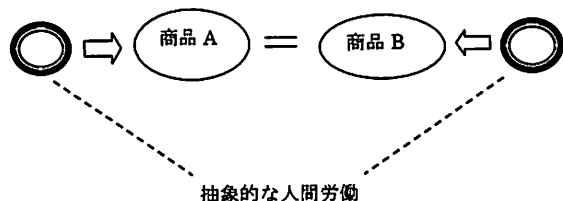
目に見えない「価値」が、例えば1クォーター小安=aツェントネル鉄という方程式によって、交換価値として現象する。しかし、この交換価値は、等価を表現している限り、「共通なるものに整約されなければならない」（『資本論』注8から前2段落）。そして、この

共通なあるものは、商品の自然的属性であることはできず、「商品の使用価値からの抽象」（同上、注 8 から前 1 段落）によって導き出される。つまり、社会的使用価値を生産する「同じ人間労働、抽象的に人間的な労働に整約される」（同上、注 8 から 2 段落）。従って、商品には、同じ人間労働に整約される「価値」と、有用性を持つ「使用価値」という二つの要素があることとなる。

3) 「価値実体」への還元について・・・(補足)

マルクスの目的は、あくまで「価値実体」にあるので、ここでは、交換価値から直接的に「労働」に還元されるのではなく、「価値の証明」に基づく還元であることに注意されたい(自分の論点)。例えば、ヴァーグナーは、この点を「交換価値の共通の社会的実体」と解釈しており、その還元方法を、

図 4



と考えていると思われる(『ヴァーグナー評注』P356 下、図 1 も参照)。マルクスは、これに対し、交換価値という「この『形態』を『共通の社会的実体』、労働に還元するのは奇妙であろう」(同上、P357 上 - 末 8)と指摘している。なぜならば、交換価値は「商品にふくまれている価値の『現象形態』(同上、P369 - 末 2)であり、「商品の本来の内容ではないからである」(同上、P369 下 - 末 8)。そしてまた、そうであるからこそ、商品は、一方では使用価値であり、他方では、(交換価値ではなくして)「価値」なのである。→ (この点、詳しくは『ヴァーグナー評注』P369 の上段で展開されている。)

4) 「価値の大きさ」について・・・図 3 参照

この様に、縦のラインで導き出された「抽象的な人間労働」(=商品生産において社会的に必要とされる人間労働)によって指定される「価値」は、その「大きさ」も同様に、社会的に必要な労働の定量、労働時間によって測られることとなる。

5) 生産物と商品の違い

自らの生産物が使用価値として他の人に役立つかぎりにおいてのみ、生産物は商品となる(=「他人のための使用価値」)。そして、「それが効用のないものであるならば、その中

に含まれている労働も効用がなく、労働のうちにはいらず、したがってまた、なんらの価値をも形成しない」(『資本論』第 1 節末尾)。

第 2 節 商品に扱われた労働の二重性

前節では、商品は、「使用価値と価値」という二要素をもって現れる、ということが明らかとなった。このことは、商品を生産する労働も、その価値に表現される限り、同様な二重性をもつ。

6) 具体的な有用労働

まず、使用対象という側面から商品に含まれている労働を考察すれば、各種、様々な商品の使用価値の中には、具体的な「有用労働」が含まれている。そして、これらの質的な差異が、商品交換や社会的分業の動機となっている。もちろん、使用価値を形成する有用労働は人間生活の基盤をなすものであって、それ自体、合目的な活動である。また、この有用労働は、常に「人間と自然との物質代謝」を媒介し、自然素材を変化させる。→ (「労働はその父であって、土地はその母である」『資本論』 - 注 13 から前段落)

7) 抽象的な人間労働

そして次に、価値という側面から商品に含まれている労働を考察すれば、その労働は、「他人のための使用価値」である商品を生産する、単純な人間労働力の支出として現れる。言い換えれば、等価の交換が成立する上着とリンネルは、「同一性質の労働の客観的表現である」(注 13 から 2 段落)、ということになる。つまり、ここでの労働は、使用価値という質的な相違からは抽象された、なんら質をもたない労働に整約されている。

そして、こうした抽象的な人間労働の属性において、労働は商品価値を形成し、他方では、合目的になされる具体的な有用労働が質的な相違を形成し、この属性において、その労働は使用価値を生産する。

8) 労働量と価値について

労働の量が価値を規定するのではなく、「量」それ自体は価値を測りうるものとして現れる(『資本論』注 16)。